



令和2年5月20日(水)
No.2 5月号
横浜市立 新羽 中学校
☎542-1680 FAX 541-1038

【HP】 <http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/jhs/nippa/> 【メール】 l2-nippa@edu.city.yokohama.jp

新羽地区の歴史を垣間見て 校長 荻野 弘

先日、新羽地区連合町内会の監事で「鶴見川舟運復活プロジェクト」の会長様が鶴見川舟運復活プロジェクトの総会の資料を学校まで届けてくださいました。

資料を拝見していて、自分の幼い頃のことを思い出しました。夏の頃だと思えるのですが祖母と母に連れられて片道約1時間半歩いて自宅から新横浜へ「セリ」摘みに毎年のように来ました。当時、新横浜駅の周辺は見渡す限り、一面田んぼばかりで新しい新幹線の線路と駅舎以外ほとんど建物はありませんでした。祖母と母がセリを摘んでいる間、ほぼ一日、飽きもせず田んぼで遊んでいたことを覚えています。帰る途中で日が暮れてきて、篠原八幡宮での縁日でハッカパイプやかき氷を買ってもらうのが何よりの楽しみでした。

市営地下鉄が昭和60年横浜～新横浜間、平成5年に新横浜～あざみ野間が開通し、この新羽の地域も徐々に開発されて発展してきたことと思います。しかし、この地域にはまだ私が幼い頃に見た景色が残っているところもあり懐かしく感じます。社会科の教員である私としては、この新羽地区周辺の歴史について、ちょっと学んでみたくなりました。お届けいただいた資料から抜粋して掲載させていただきたいと思います。生徒や保護者の皆様には、地域の歴史についてはご承知の方も多いかと思いますが、生徒の皆さんには、自分たちの住む町が歩んできた足跡を知ることで、自分の町に興味を持ち、未来を考え、支える人になってほしいと思っています。

鶴見川（支流を含む）と舟運のあらまし 鶴見川舟運復活プロジェクト資料より

鶴見川には、古くは杉山神社を創建したといわれている氏族が房総半島から東京湾を経て鶴見川を遡ってきたといわれています。また、新羽の西方寺も室町時代に舟で鎌倉の極楽寺から相模湾、東京湾を経て鶴見川を遡って新羽に移転してきたといわれています。鶴見川には古くからこのような伝承が流域にはあります。

江戸時代になると経済構造が石高制になり大量の年貢米を輸送する必要から、各地で舟運が発達していきました。鶴見川も同様に安政2年刊「武州橘樹郷神奈川宿組合村々地頭姓名基他書上帳」によると河口の生麦から約16km上流の川向迄に河岸が点在していたようです。舟運は江戸時代の年貢米、下肥に始まり、寒素麵、天然氷、資材、日用品等が運ばれていました。港北区内の鶴見川的主要な支流は、鳥山川、早淵川、矢上川がありますが、鳥山川は、小机、岸根、鳥山、篠原の余った水を流すための水路といわれ、舟運に関する記録はないようです。早淵川は、大正2年刊「大綱村郷土誌」に「蛇行がすごいで豪雨の際には氾濫を起こし周辺の村に被害を及ぼすので享保年間に直線に改修した」とあります。また、矢上川も大正年間に直線化の河川改修がされたようです。

また、港北区内には、11か所の「河岸」（船着場）があったようです。新羽中学校に近いところは、現在の新羽橋よりやや下流にある「太尾河岸」とその対岸の「新羽河岸」があり、日産スタジアム方面の亀甲橋のあたりには「小机中瀬河岸」があったようです。「太

尾河岸」からは、太尾村、勝田村の年貢米のほか寒素麵、天然水などを積出し、生活用品や石造物を搬入していたという記録が残っています。

注連引き百万遍（しめひきひゃくまんべん） 新羽地区注連引き百万遍保存会資料より

江戸中期、信州浅間山爆発の後に発生した天明の大飢饉は、遠いここ中の窪部落（現新羽町中之久保一帯）でも火山灰による全滅に近い被害と悪疫になやまされたようです。弱い幼子の命が次々と奪われ、途方に暮れていた村人は。一人の行者の勧めに従い、氏神様にすがって注連を頂き、稲藁で編んだ3メートルあまりの3匹の大蛇の背にそれを立てて檜の木で作った突き出た眼球、真っ赤に塗った長い舌を作り、部落への入口の三方のヒイラギの大木に巻き付け「病をここで食べつくしてください」と祈りをこめたお神酒をかけ祈願したと伝えられています。以後、毎年5月1日、男性は庭で藁で大蛇を作り、地域の入口の木に掲げ、一方、女性は部屋で地蔵菩薩を念じて大きな数珠を回し、百万遍の念仏を唱えて、大地の恵みに感謝し子供たちの健康を願い、地域の安寧を図るといわれているこの行事は江戸時代から連綿と続けられてきましたが、先の大戦で中断されたものの昭和52年、中の窪の山の上に新羽小学校、新羽中学校ができるにあたり、子供達を守るという意味で復活されました。後に「横浜市民俗文化財」に指定されました。



〈新羽小学校の注連縄〉



〈新羽中の注連縄の由来揭示〉

「新羽（にっば）」の地名の由来

横浜市市民局「横浜の町名」より

古くは新羽村といい、都築郡に属していました。明治23年市町村制施行の際、隣村とともに新田村（新羽の新と吉田・高田の田の合成）を立て、新田村大字新羽となり、昭和14年横浜市に編入され新羽町となりました。新羽の「羽」文字のごとく「新しい」という意味のようですが正確な意味は不明のようです。「羽」は「端」であり、「山の端」あるいは鶴見川で南側を削り取られた形となっている新羽の丘陵（南側の端の山は亀ノ甲山とよばれる）を指したものと思われます。鎌倉時代の文献に「武蔵新羽郷」とあり、その起源は中世あるいは、それ以前までさかのぼることができるようです。

◆生徒・保護者の皆様へ◆

4月から3回の「学習課題・健康観察票提出・受け取り日」にご協力くださいました。ありがとうございます。学校では、6月1日からの学校再開に向けて準備を進めているところです。「情報」はわかり次第すぐに配信メールやホームページでお知らせします。また、今後の学校での教育活動の進め方や年間を通した予定等もできる限り早くお示しできるようにしたいと思っておりますので、もう少しお待ちくださいますようお願いいたします。